

英語を用いて表現し、自分らしく

コミュニケーションを図ろうとする子どもの育成

小 学 校 和 田 郁、川口ローラ
研究協力者 池野 修、立松 大祐 (愛媛大学)

1 主題設定の理由

1年次研究において、「国際交流を楽しみ、英語を用いて自分らしく表現できる子ども ―コミュニケーション力の育成―」を目指して、授業実践を重ねてきた。

近年の急速なグローバル化により、異文化や多言語の人たちとかがわることが増えてきている。日本においても、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会では、コロナ禍の制限がある中でも、各県のホストタウンで日本を訪れた海外選手と交流をしたり、小・中学校で子どもたちが外国語を使って応援メッセージを送ったりするなど、外国の人とのかかわりが見られた。このように、日本で生活するだけでも、異文化や多言語を持つ人々との共存の必要性を高めており、外国語によるコミュニケーションは、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定されている。

小学生の発達段階においては、外国の人と望ましい関係を築いていくために大切なことは、外国の文化等に対する知識・理解に加えて、①外国の人と進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育成したり、②相手を尊重したり、③外国の人に対する苦手意識や心のバリアを作らないようにしたりすることであると考えている。

外国語活動や外国語科においては、外国の人との交流学习に向けた活動を行い、目的や相手意識を持って英語に慣れ親しむ学習を行ってきた。また、くすのき学習【国際】では、外国の人との交流学习の機会を保障し、外国語(英語)を用いながら、外国の人に来校してもらったり、インターネットを利用して外国に住む同年代の子どもと話したりするなど、コミュニケーションの楽しさを味わうことを大切にしてきた。そうすることで、子どもは外国語をコミュニケーションの手段の一つとして用いながら、外国語を意欲的に学ぶ姿が見られた。

しかしながら、子どもたちを取り巻く環境は、学習塾や習い事に通うことで多忙化し、友達との遊びを通じたコミュニケーションの場の減少や少子化、核家族化、また、SNSの普及によるコミュニケーション不足などが懸念されている。

2年次は、1年次研究に引き続き、外国語活動・外国語科の授業を、外国との交流学习に向けた活動だけでなく、一番身近な異文化である友達とのかかわりを大切にして実践を行った。様々な考え方を持った友達と英語によるコミュニケーションを大切にした学習を行うことで、「自分のことが友達に伝わってよかった」「友達のことを知れてよかった」「友達のことをもっと知りたい」「他の人はどうだろう」という気持ちを高め、子どもたちに豊かなコミュニケーションを行うことのできる資質・能力を養うことを目指した。

最終年次も引き続き、「英語を用いて表現し、自分らしくコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成」を研究主題とする。コミュニケーションを図ろうとする態度を育成することが、これからのグローバル化社会を生きていく子どもにとって大切であると考え、本研究主題を設定した。

2 くすのき学習【国際】(外国語活動)・外国語科における「子どもと創る『深い学び』」

(1) 子どもと共に学びをつなぐくすのき学習【国際】(外国語活動)・外国語科の授業づくり ア くすのき学習【国際】(外国語活動)・外国語科における『深い学び』とは

くすのき学習【国際】は、外国語活動と外国語科を総合的な学習の時間及び特別活動と合わせて合科的に扱っている。そのため、「話すこと」「聞くこと」においては、言語や文化についての体験的理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成、外国語の音声や基本的表現への慣れ親しみ及び、活用等がねらいとして求められる。その上で、異文化を持つ人との出会いを大切にしながら、コミュニケーションを図ろうとすることが非常に大切であると考えている。そこで、くすのき学習【国際】で育てたい資質・能力を、①異なる文化を持つ人(外国の人、友達)とかかわるよさや楽しさに気付き、②外国の人や文化に興味を持ち、外国の人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度とする。また、教科等の枠を超えて汎用的に働く資質・能力を「コミュニケーション力」と捉えている。

子どもたちは、異文化を持つ人との出会いに期待感を持ち、心を動かしながら意欲的に学習に取り組む。コミュニケーションを図る基礎(素地)となる資質・能力を育成する場面では、具体的な場面等を設定し、外国語を用いて、互いの考えや気持ちなどを伝え合う対話的な言語活動を重視する。外国語を通して、改めて友達のことを知ったり、自分のことを見詰め直したりすることから、自信を持ってコミュニケーションを図ろうとする態度を育て、異なる文化を持つ人との交流への意欲を持たせる。そして、身に付けた力を「生かし・発揮する」場(くすのき学習【国際】)では、具体的な課題等を設定するなどして学習した語彙や表現等を実際に活用する活動を充実させ、言語活動の実質化を図る。これらにより、英語で自分のことが伝わってよかったと体感させるとともに、交流相手を通じて日本や自分自身について再発見させる。

そこで、くすのき学習【国際】(外国語活動)・外国語科における「深い学び」を以下のように考えた。

外国語(英語)を手段の一つとしてコミュニケーションを楽しみ(他者とつながり)、生活や他教科等の学習にも生かし、発揮しようとする学び

イ 子どもと共に学びをつなぐくすのき学習【国際】(外国語活動)・外国語科の授業

くすのき学習【国際】【外国語活動・外国語科において、子どもと「学習材」「他者」「自分自身」をつなぎ、英語を用いて表現することは、自分らしくコミュニケーションを図ろうとすることにつながると考える。

外国語活動・外国語科における題材は、それだけを見ると、とても簡単なものであり、子どもにとっては、意欲や興味を喚起させるものではない。その題材を英語で行う必然性を持たせることが重要となってくる。また、決められた表現の単なる反復練習をさせるのではなく、伝え合う目的や必然性のあるコミュニケーションを行わせることで、子どもは意欲的に「学習材」とつながろうとするであろう。その「学習材」を基に、「他者」とつながる。相手の意向を理解し、互いの思いを伝え合うことで、友達のことを分かってよかったと感じながら、「他者」と積極的にかかわろうとする。そして、そのやり取りや振り返りを通して、自分の成長や変容を見詰め直すことで、「自分自身」とつながる。英語で自分のことが伝わってよかったという充実感を味わうことで、「自分のことを伝えたい」「友達のことを知りたい」と他教科等や自分の生活においても生かそうとすると考える。

また、くすのき学習【国際】においては外国語活動及び外国語科の学習を生かす場として交流学習を設定する。外国の人との交流学習に向けて、英語の語彙や表現を習得したり、活用したり、伝えたい内容を探究したりして、学習過程で子どもが自ら課題を見付けて解決に導こうとするなど、子どもの学びの場の広がりが期待できると考える。そして、友達と協働しながら、異文化を理解し、外国の人(「他者」)との交流活動を通して、自分自身のよさに気付くのである

う。このように子どもと「学習材」「他者」「自分自身」がつながるよう手立てを講じることで、他教科等や自分の生活の中で、自分らしくコミュニケーションを図ろうとしていくと考える。

(2) 子どもの学びをつなぐ指導の手立て

ア 学習材とつなぐ手立て（主に「見方・考え方」との関連）

くすのき学習【国際】で、オーストラリアやカナダなど、外国の人との交流の場を設定し、コミュニケーションの目的や場面、状況等を示すことで、英語でのコミュニケーションに必然性を与え、子どもの外国の人と交流したいという気持ちを高めることができる。また、ALTの出身国の話を聞き、自分の国との相違点について考えたり、ALTとJTEのコミュニケーションモデルを見たりすることで、子どもたちは交流の見通しを持ち、「自分のことを伝えたい」「交流が楽しみだ」といった意識を高めることができる。そして、「伝えたい」気持ちが高まることで、教師の示す言語材料だけでなく、新たに「こんなことを言ってみよう」「こんな表現ができるのではないか」という気持ちも自然と子どもたちから出てくると考える。そのような交流に対する期待感は、子どもの心の動きであり、英語を使った表現を意欲的に学んだり、楽しんだりしようとする活動を適切に設けていくことが必要である。

イ 他者とつなぐ手立て（主によりよい「対話」の在り方・方法）

「追究」の場面においては、言語活動を重視した活動を行う。言語活動とは、「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動」と定義されている。多様な考えや意見が出るテーマや考え、気持ちを伝え合う場を設定することが、友達と自然にコミュニケーションを図ることにつながると考える。そして、「友達のことが分かってよかった」「友達のことをもっと知りたい」など、互いの考えや思いを伝え合い、自分の考えや学び方に変化が生まれてくる対話的な学びを行うことで、「他者」とつながりたいという気持ちが高まるであろう。そのためには、自信を持って言語活動に取り組めるようにすることが大切であり、子どもが互いの考えや思いを伝え合うための言語材料を聞いたり話したりする時間を十分に確保することが必要である。

また、「追究」の場面は、学級やグループなどの集団での学びを大切にしながら、「外国の人と交流する」という目的に向かって活動する場面でもある。学級集団として交流学習を成功させるためには、自分が伝えたいことを英語で話すだけでなく、友達と協力して発表する練習をしたり、交流に必要な準備を行ったりするなど、「他者」と英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする姿が表出すると考える。

ウ 自分自身とつなぐ手立て（主に自覚のための自己評価の方法、過去・現在・未来）

学びの中で、子どもと「自分自身」をつなぐためには、自分らしくコミュニケーションを図れたかどうかを実感させることが大切である。そのために、子どもの発表や振り返りの記述の中から、「英語を用いてコミュニケーションができたか」「学習を楽しめたか」などについて見取る。また、共に学習を進めてきた友達との相互評価や、ALTからの評価など、多面的な評価も行う。特に、ALTからの評価は英語を用いて学習を行う外国語活動・外国語科において、「ALTに英語が伝わってよかった」「もっとALTと話してみたい」という気持ちを高めることができる。また、交流活動においても同様に、「もっと交流をしてみたい」と次の交流活動を楽しみにするとともに、異文化に接することで、日本のよさを再認識したり、自分の成長や変容を自覚したりすることができる。と考える。

(3) 「子どもと創る『深い学び』」における評価

ア 評価の視点

私たちが目指すべき子どもの姿とは、外国語（英語）を手段の一つとして、コミュニケーションを楽しみ（他者とつながり）、生活や他教科等の学習にも生かし、発揮しようとする姿

と捉えている。そのために、次の二つの視点で、子どもを評価していく。

- ・異文化を持つ人ともコミュニケーションを楽しんでいる。
- ・コミュニケーションの目的や場面、状況等に応じて、既習の英語表現を用いようとしている。

イ 評価の具体的な手立て

(ア) 空間軸から見た手立て

様態観察・ワークシート・成果物・振り返りシート等を手立てとして、多角的・客観的に子どもが何ができるようになったかを見取り、指導の改善につなげる。

様態観察では、教師はやり取りの様子から子どもの理解度や積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、子どもがどのような場面でどのような英語を用いているかなどを総合的に評価する。

ワークシート・成果物では、子どもたちが出来上がった物を振り返り、自分の学び方を客観視することで、次のステップに進むために自分に必要なことを考えることができるようになる。また、これらをまとめてポートフォリオとして持つておくことで、いつでも既習の表現を振り返り、相手や目的に合わせて活用できると考える。

(イ) 時間軸から見た手立て

単元の始めに、交流活動についての見通しを持ち、これからの学習を進めていく上で必要な知識・技能について知る。また、学習過程において、定期的に自分の目標に対する到達度を確認させたり、交流活動後に、「今日の授業で分かったこと」「経験して感じたこと」を振り返らせたりする。このことにより、外国語活動・外国語科で体験的に理解したことを、実際に活用できてよかったと感じさせたい。また、もっとコミュニケーションを図りたいという気持ちを育ませたい。

(ウ) 自己評価

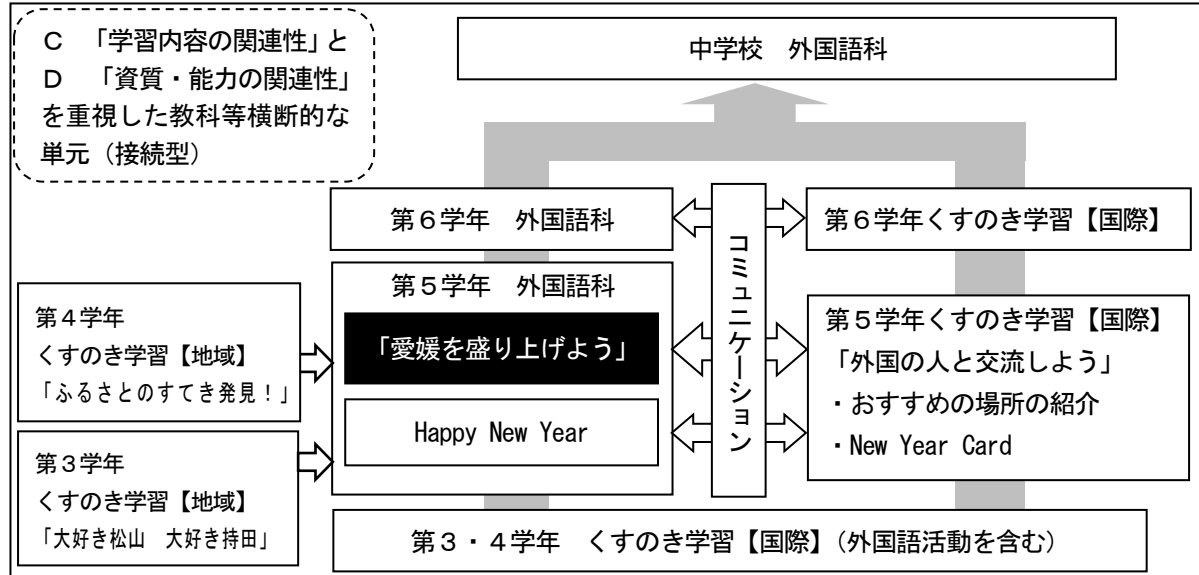
毎時間、振り返りシートによる自己評価を行う。数値による自己評価や自由記述による振り返りで、本時の目当てに対する達成度や理解度を把握する。また、単元を通して行うことで、自分の成長を実感したり、教師がその変容を子どもにフィードバックしたりすることで、これからの学習に主体的に取り組むことができる。また、他者評価を行い、コミュニケーションに関するよい点を考え、友達のよさを自分に生かそうとしたり、自分のよさにも気づき、自信につなげたりしたいと考える。

(和田 郁)

3 実践事例

第5学年
愛媛を盛り上げよう 外国語科（+くすのき学習【国際】【地域】）

【単元全体構想について】



本単元は、C「学習内容の関連性」とD「資質・能力の関連性」を重視した教科等横断的な単元である。前単元「What would you like? ランチメニューを考えよう」では、特別な人にランチメニューを作り、その紹介を行った。ただその人のことを考えながら自分でメニューを考えるだけでなく、実際にその人にどんな食べ物が好きか尋ねたり、レストランで店員と客との注文の場面を設定したりするなど、他者とのやり取りを大切に単元を構成した。子どもたちからは、ランチメニューを作りながら、友達とのかかわりを楽しむことができたという前向きな感想が多く見られた。しかし、必要以上の食べ物カードを集めてしまい、ランチメニューを仕上げる際に、使わなかった食べ物が出たり、店員と客のやり取りから、店でのやり取りは楽しいとだけ感じたりする子どももいた。そこで、社会科の食料生産やコロナ渦における飲食店の状況などに触れながら、食料を大切にする気持ちを高めたり働くことの大変さについて考えさせたりした。さらに、新型コロナウイルスの影響は飲食店だけでなく、愛媛県を訪れる人の減少にもつながっていることから、子どもたちは、「松山や愛媛県に興味を持ってもらいたい。」「またたくさんの人に松山に来てもらいたい。」という思いが高まっているため、本単元を以下のように設定した。

本単元では、自分たちが住んでいる都道府県や地域には、名産品や名所があることに目を向けさせ、自分たちのお気に入りのものやことについて、簡単な英語で紹介することをねらいとしている。その紹介を学級内の紹介に終わらせるのではなく、くすのき学習【国際】の時間を用いて、実際に外国人（オーストラリアの友達）に向けて行うことで、英語を用いて紹介する必然性を持たせる。松山や愛媛県について知らない人に、分かるように伝えるにはどうすればいいか考えるなど、相手意識を持つことのできる単元であると考え。そして、外国語科で学んだ英語を用いてコミュニケーションを行い、自分たちの英語が伝わったと実感することで、これからもいろいろな人とコミュニケーションを図っていきたいという気持ちを高めることができると考える。

まず、「出会い」の場面では、前単元の紹介の表現 “This is ~.” を用いた教師の「自分の町しようかい」を聞く。名産品や名所の名前を言っただけでは、一体それがどのようなものか相手に伝えることができないことに気付かせ、大きな数や様子を表す表現を用いて詳しく説明する言い方を知るなど、単元を通して伝える相手を意識した活動となるようにする。

「追究」の場面では、まず、紹介や詳しく説明する言い方を聞いたり友達に話したりするなど、慣れ親しむ時間を確保する。そして、第3・4学年のくすのき学習【地域】の学習を思い出しながら、紹介したい内容について考える。紹介する内容でグループ分けを行い、子どもたちが協働しながら学習を進められるようにする。「自分の町しょうかい」を交流する場面では、グループを離れいろいろな友達と紹介し合い、助言をもらえるようにする。相手に分かるように紹介するための内容やコミュニケーションに関する事など、話し合う内容を明確にすることで、助言をしやすくする。それを全体の場で共有し、解決に向けて話し合わせたりするなど、主体的・対話的な活動となるよう促す。友達と協力しながら「自分の町しょうかい」を完成させることで、オーストラリアの友達との交流への意欲を高め、くすのき学習【国際】での「自分の町しょうかい」に臨ませる。

「振り返り」の場面では、くすのき学習【国際】での「自分の町しょうかい」を振り返り、外国語（英語）を用いて、うまくかかわれたところや上手にできなかったところについて話し合う。その上で、うまくかかわれた会話について、全体で練習をする。そのことにより、これからも外国の人とコミュニケーションを図っていききたいという気持ちが高まると考えた。

【単元のねらい】

- 名産品やお気に入りの場所、「自分の町しょうかい」の言い方を理解し、「自分の町しょうかい」を言ったり聞いたりすることができる。
- 詳しく伝えたり自分の思いを付け加えたりしながら、「自分の町しょうかい」をすることができる。
- 他者に配慮しながら、「自分の町しょうかい」をしようとする。

【単元の展開】（全7時間）

場面	子どもの課題意識と主な学習活動	評価の規準	時間
出合い	<p>「自分の町しょうかい」はどのようにすればいいだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 教師の話聞き、「自分の町しょうかい」の仕方を知る。 ○ 「自分の町」について詳しく紹介する言い方を知る。「自分の町しょうかい」の言い方に慣れよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「自分の町しょうかい」に関心を持ち、紹介したいという意欲が高まっている。 ● 相手に分かりやすく伝える言い方を理解している。 	2
追究	<ul style="list-style-type: none"> ○ 紹介する表現や詳しく言う表現を聞いたり言ったりして、その表現に親しむ。 <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">くすのき学習【国際】 紹介するものを決めよう。</p> <p>「自分の町しょうかい」を行う準備をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 友達と協力し、「自分の町しょうかい」を考える。 ○ 他のグループと交流し、よりよい紹介となるように助言をし、それを基に紹介の練習をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「自分の町しょうかい」を聞いたり言ったりして、その表現を理解している。 ● 紹介の表現を用いたり、詳しく説明する表現を用いたりして、「自分の町しょうかい」を考えている。 ● 友達からのアドバイスを基に、相手に伝わるように、「自分の町しょうかい」を見直し、紹介している。 	4
振り返り	<p>「自分の町しょうかい」をし、活動を振り返ろう。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">くすのき学習【国際】 「自分の町しょうかい」をしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 外国の人とうまくかかわれた英語表現を振り返り、全体で練習し、次の交流に生かす。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「自分の町しょうかい」を振り返り、これからの交流に生かしたいという気持ちが高まっている。 	1

【単元の実際】

(1) 「出会い」の場面

(第1時)

- 前単元「What would you like? ランチメニューを考えよう」でのランチメニューの紹介を思い出させ、その方法を用いて教師のお気に入りの場所について紹介した。すると、子どもたちからは、「お気に入りの場所がどこかは分かったが、なぜそこがお気に入りの場所なのかが分からない。」という意見が出てきた。再度、教師がそこでの有名なことや詳しく伝える言い方を用いて、お気に入りの場所を紹介し、本単元のゴールを示した。また、くすのき学習【国際】の時間に、インターネットの会議システムを用いて交流を行っているオーストラリアの友達に松山（愛媛）について紹介する活動を取り入れることで、子どもたちの自分たちの町を紹介したいという意欲化を図るとともに、単元を通して目的意識・相手意識を持って学習に臨めるようにした。
- 教師の日本の有名なものを紹介を聞いたり、子どもたちが自分の知っている有名なものを紹介し合ったりすることで、“**It’s famous for ～.**”と言う表現に親しませた。

(第2時)

- 前時の有名なものを紹介する言い方“**It’s famous for ～.**”を用いて、日本の名所や名産品の紹介を聞かせ、その表現のインプットを図る。その後、この表現でお気に入りの場所を紹介することができるかと子どもたちに聞くと、「どう有名なのかが分からない。」「どう有名なのを伝えたい。」という反応が返ってきたため、大きな数の仕組みや様子を表す言葉（形容詞）について学習をし、詳しく説明する言い方を確認した。この1時間だけでは定着を図れないため、今後の学習において復習を継続した。

(2) 「追究」の場面

(第3時)

- 有名なものを紹介する言い方や、大きな数、様子を表す言葉（形容詞）を用いた3ヒントクイズを行い、繰り返し言ったり聞いたりすることで、その言い方に慣れ親しませた。また、教師のお気に入りのものを聞き、紹介の仕方を振り返るとともに、ただ紹介するだけでなく、既習の表現(**I like ～. You can ～.**)を用いて自分の思いを伝えることで、聞き手を納得させることができることを押さえた。

(第4時)

- くすのき学習【国際】の時間に、第3・4学年のくすのき学習【地域】の学習を振り返りながら自分が紹介するものを決めた。自分が調べたことには思い入れがある場合が多く、自分の思いを持って紹介したいことを考えることができた。また、「道後温泉」「みかん」「食べ物」など、紹介する内容によりグループを決めた。グループの中で、似たような英語表現を使用するようになるため、紹介例を基に教え合いながら紹介原稿を考えるなど、協働して学習を進めることができた。
- 原稿ができた子どもから、実際にALTに紹介をさせた。ALTには英語の読み方を確認してもらうとともに、オーストラリアの子どもの立場で聞いてもらい、日本のものはそのままでは伝わらないことを子どもたちに気付かせた。相手意識を持って、原稿を再考する必要性について考えさせた（写真1）。



写真1 ALTとの練習

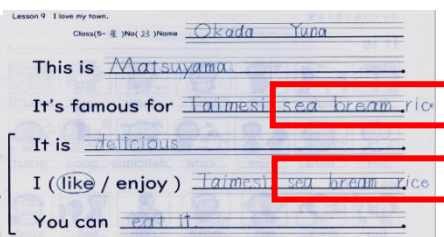
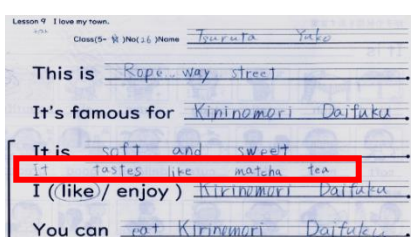
(第5時)

- 前時の学習を振り返らせ、オーストラリアの友達に伝わるように紹介原稿について見直しを行った。まず、別のグループの子どもに紹介し合い、それが伝わるか確認を行った。そして、どのように直せばよいかアドバイスをし合った。紹介は英語で行うが、アドバイスは日本語で行うことで、自分の思いをしっかりと伝えられるようにした。その後、グループに戻り、アドバイスを基に紹介

原稿を再考した（写真2）。日本の言葉は英語に直したり、詳しく説明を入れたりした（資料1）。子どもたちからは、「自分たちには当たり前のことでも、それが伝わらないことがある。」「オーストラリアの友達に伝わるように、紹介を直すことができた。」と相手の立場に立って紹介を再考することができた。



写真2 グループ活動



資料1 紹介原稿

(第6時)

- 紹介の仕方に視点を当てて、紹介の練習を行った。事前に気を付けるポイントを子どもたちに聞くと、「スマイル」「ジェスチャー」「アイコンタクト」「クリアーボイス」などの話し方だけでなく、「聞いている様子を見て、伝わっているか考える」と、この活動においても聞き手のことを考えて練習を行う姿が見られた。紹介の様子を客観的に見られるように、自分たちの紹介の様子をタブレット端末で撮影し、紹介の様子を見返したり、映像を基にALTからアドバイスをもらったりして、自分たちの紹介に生かした（写真3）。子どもの振り返りには、「タブレット端末で撮影したので、アイコンタクトができていないことが分かった。気を付けたい。」「グループの友達に教えてもらって、話し方を改善できたのでよかった。」「練習がしっかりできたので、オーストラリアの友達との交流が楽しみだ。」と相手意識を持ちながら練習に取り組み、紹介に向けての自信を深めることができた。



写真3 練習の様子

(3) 「振り返り」の場面

(くすのき学習【国際】での交流活動)

- 交流の最初は、緊張を感じさせたが、オーストラリアの子どもたちが頷いたり相づちを返したりしながら聞いてくれたことに安心をして、だんだん練習の通りに話せる子どもが増えてきた（写真4・5）。子どもたちの中には、ただ原稿を話すだけでなく、相手の表情を見ながら理解度をチェックし、ジェスチャーを入れるなど、相手の立場に立って紹介をすることができた子どもも多くいた。交流の振り返りには、「紹介してくれたことに質問をしてくれてうれしかった。」「オーストラリアの友達に分かるように、ゆっくり笑顔で話せてよかった。」「また、交流をしたい。」という達成感から、次の交流への期待感を膨らませることができた。

(第7時)

- 交流を基に、再度子どもたち同士で紹介し合った。練習の段階では、一方的に感じた紹介も、交流の後では、顔を上げて相手の方を見ようとしたり、相手の表情をうかがったりする姿が見られるようになってきた。また、上手にオーストラリアの子ども



写真4・5 交流の様子

に伝えられたと感じた子どもは、自信を持って紹介に臨んでいた。反対に上手に伝えられなかったと感じていた子どもは、友達の様子を見たり、自分で交流の様子を振り返ったりして、次の交流で気を付けることを考えるなど、今回の交流を前向きに捉えており、どの子どもも次の交流を楽しみにしていた。

【単元の成果と課題及び次年度の実施に向けて】

- ただ紹介を行うだけでなく、実際にオーストラリアの子どもに伝える活動を設定することで、目的意識・相手意識を持った活動となった。
- 「オーストラリアの子どもに伝わるように」と意識付けることで、紹介原稿を作ったり、コミュニケーションのとり方について考えたりする際に、協働して学習に取り組むことができた。
- 話すこと[発表]領域であったため、交流のときに十分にやり取りを引き出すことが難しかった。学期に1度、どの単元で交流を図れるかを予め考えておく必要がある。
- どの子どもも交流に参加できるように、話型を固定しすぎたため、子どもたちの自由なやり取りが生まれにくかった。自由に話せる部分とそうでない部分をはっきりさせる必要がある。
- ☆ 外国語科で目的に合わせて交流に必要な英語を身に付け、それを生かして交流ができる場をくすのき学習【国際】で設定するようにするツーステージ型で設定することで、積極的なやり取りを生み出せるのではないかと考える。

(和田 郁)

4 研究のまとめ

(1) 子どもの学びをつなぐ指導の手立てについて

ア 「出会い」の場面

- 自分らしくコミュニケーションを図ろうとする姿につながるように、コミュニケーションの目的・場面・状況を示したり、外国の人との交流を設定したりしたことで、英語を用いる必然性が子どもの中で高まり、意欲的に英語で表現しようとする姿が見られた。
- コミュニケーションを図る相手を明確に意識させたことで、「こんなことを言ってみたい」という子どもの思いがより具体的になり、英語で表現しようとする内容を深めたり広げたりすることができた。
- 「学習材」とつながる教師自身の体験やエピソードをリアルに紹介することで、子どもも自分の本当の考えや思いを伝えようとする姿が多く見られるようになった。
- 単元によっては、自然な「出会い」を提供しにくいものがある。また、外国の人と交流できる場面設定を毎回行うことも現状では難しい。「なぜ、英語で表現する必要があるのか」という点を、子どもが納得できるような単元構想を練っていく必要がある。
- その一方で、英語を用いる必然性を高めることだけにとらわれず、コミュニケーションの楽しさが子どもに伝わる「出会い」にしていく意識も重要である。

イ 「追究」の場面

- 目的意識や相手意識を明確に持たせて言語活動を行ったことで、「もっと知りたい」「もっと伝えたい」という子どもの意欲を高めることができた。
- 考えや思いを伝え合うための言語材料を聞いたり話したりする時間を十分に確保したことで、子どもが自信を持って言語活動に取り組むことができた。
- ペアやグループ活動を意図的に取り入れ、友達やALTと共に学ぶ姿勢を大切にすることが、「他者」とかかわる楽しさや喜びを感じる体験の積み重ねにつながった。
- 機械的に発話するのではなく、自分の本当の考えや思いを込めて対話することに、子どもは楽しさ

を感じるのだということを再認識できた。

- 本当に言いたいことを言おうとすると、表現したい内容がより具体的になり、既習の英語表現だけで表すことが難しい場合もある。自分で調べたり ALT に尋ねたりするなど、子ども自身で課題を解決することができるような授業展開を考えていきたい。

ウ 「振り返り」の場面

- 友達同士で互いに見合っただアドバイスをしたり、タブレット端末を用いて視覚的に自分の表現を振り返ったりしたことで、「スマイル」「ジェスチャー」「アイコンタクト」「クリアーボイス」などのポイントをより意識してコミュニケーションを図ろうとするようになった。
- 「何のために、誰に伝えるのか」を意識した言語活動を行ってきたことで、相手の表情や反応を見ながら話すことや、相手の理解度を確かめながら会話を進めることができるようになってきた。
- 「伝わってよかった」「知れて嬉しかった」など、コミュニケーションに対する個人の達成感を学級全体で共有してきたことで、積極的に「他者」とかかわろうとする雰囲気が高まり、生活や他教科等においても、様々な相手とコミュニケーションを楽しむ姿が多く見られるようになった。
- 正しく話せたかどうかで、自分のコミュニケーションに関する成功や成長を判断している子どももいる。文法的に完璧な英語でなくても、自分なりに伝えよう、相手を理解しようとする姿勢が大切であることを子どもが感じられる「振り返り」を積み重ねていきたい。

(2) 子どもと創る「深い学び」における評価について

ア 指導者評価の手立て

- コミュニケーションの目的や場面、状況を具体的に設定することで、評価の観点が明確になり、指導の改善が図れた。
- 外国の人だけでなく、身近な友達も異文化を持っていることを子どもが体験的に理解できる言語活動を行っていく。

イ 自己評価の手立て

- 自分の成長やコミュニケーション・言語に関する気づきを自由記述により振り返り、次時の冒頭で学級全体にフィードバックしたことで、一人一人が学びを深めたり広げたりすることができた。
- 外国語を通して学んだことを、どのように生活や他教科等で生かしているかを見取ることができる評価の在り方を工夫していきたい。

くすのき学習【国際】(外国語活動)・外国語科では、「英語を用いて表現し、自分らしくコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成」を目指して研究を進めてきた。シチュエーションを意識したコミュニケーションを繰り返し実践してきて感じるのは、人とかかわるよさや楽しさは、人かかわることではか感じるができないということである。今後も、人との出会いを大切にしながら、進んでかかわろうとする姿を子どもと共に実現していきたい。

(和田 郁)